INTERVIEW
403人目
上

千人回峰

心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け巡り、悟りを開く天台宗の荒行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

渋谷慶一郎

Keiichiro Shibuya

音楽家

音楽は難しいからこそ一生飽きることはない



【代官山発】プロフィールにもあるように、渋谷慶一郎さんは作曲家、演奏家といった枠にとどまらず、初音ミク主演のボーカロイド・オペラやAI搭載の人型アンドロイドが指揮をするアンドロイドオペラ、空間音楽を奏でるサウンド・インスタレーションなど、国内外で多彩な音楽活動をされている。それだけに、渋谷さんの肩書が何になるのか気になり、直接うかがってみたところ、やはり「音楽家」であるそうだ。「マルチ・クリエーター」などとは、死んでも呼ばれたくないとのこと。音楽家としての誇りを感じる。　（本紙主幹・奥田芳恵）

歌が下手だったから音楽の道に導かれた?!

奥田　渋谷さんは、音楽の領域で幅広い活動をされていますが、そもそも音楽と出会われたのはいつ頃で、どんなきっかけがあったのでしょうか。

渋谷　小さな頃、実は歌が下手だったんですよ。

奥田　えっ！　ちょっと信じられませんが……。

渋谷　それを心配したバイオリニストの母親が、音大生がアルバイトで教えている音楽教室に私を連れて行ったんですよ。それが4歳か5歳のときですね。それで小学校に入る頃、「習う楽器を選びなさい」と言われたとき、そこにとてもきれいな先生がいたんです。そこで私は楽器ではなくて「あの人！」と指差したんです（笑）。その先生がたまたまピアノの先生だったので、ピアノを習うことになったのです。

奥田　ちょっとおませですね。でもその出会いが、音楽家へのスタートになったと。

渋谷　きれいな先生だから毎回レッスンに通うのが楽しくて、それで続いたということはありましたが、当時、音楽を仕事にしようとは考えていませんでした。

奥田　本格的に音楽家になろうと思ったのは？

渋谷　父は社会心理学者だったのですが、私が中学1年生のときにガンを患ったのをきっかけに、私に「おれはもうすぐ死ぬから、自分の人生を決めろ」と言ったのです。いきなりそう言われても答えられないので、図書館や美術館に通ったり、映画を見たりして考えたのですが音楽が一番楽しそうだと思い、音楽家になりたいと父に話しました。ところが父は大反対で、大げんかになって



PROFILE　1973年、東京生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。2002年、音楽レーベルATAKを設立。先鋭的な電子音楽作品からピアノソロ、オペラ、映画音楽、サウンド・インスタレーションまで、幅広い領域で活動を行う。東京とパリを拠点に国内外で作品を発表し、人間とテクノロジー、生と死の境界領域を作品を通して問いかけている。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi
撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawaa
2026.9.25／都内のアタック・トーキョーにて



愛用のフィルムカメラ「CONTAX T3」

「CONTAX T3」は、渋谷さんが20年ほど前に購入した高級コンパクトフィルムカメラ。これをインスタグラムにアップしたところ、写真専門誌「IMA MAGAZINE」から連載の依頼があり、定期的にポートレート写真日記「Humanity」を発表している。白黒フィルムでレタッチなしという、ウソのない世界が気に入っているとのことだ。



しまいました。

奥田　どうしてお父さまは反対したのでしょうか。

渋谷　やはり、音楽で食べていくのは難しいからですね。その判断は正しいと思いますが、父も折れてくれて、私は音楽家の道を進むことになったのです。

奥田　音楽が一番楽しそうと思った理由は？

渋谷　一番難しいジャンルであり、その分、可能性が広がっていると思いました。人生、飽きることはないだろうなと思ったんですよ。もともと飽きっぽいところがあるので、自分が飽きないことが大事だと思いました。だから、音楽をやらせてほしいと。

奥田　もちろん、今も飽きていないと。

渋谷　そうですね、たいがいのことは飽きるのですが、音楽は飽きないですね。

アカデミズムの「抑圧」を受けたその先にあったものは

奥田　そして渋谷さんは、東京藝術大学の作曲科に進まれるわけですが、在学中から音楽のお仕事をされていたと聞きました。

渋谷　アレンジャーやプロデュースなどの仕事をしていました。貧乏学生でしたからお金を稼ぐという目的もあったのですが、大学以外の世界も知りたいという思いもありました。

奥田　東京藝大というと、日本の芸術系大学の最高峰で、才能のかたまりのような人であふれているイメージがあります。

渋谷　そんなことはないですね。入学するのが難しいため、入った時点で人生の目的を達成した気になってしまう人もけっこう多いんですよ。そういう人は、生活を守るためにアーティストを目指すことなく、安易に就職してしまったりする。絶対自分はそうはならないぞと思い、実際、一度も就職することはありませんでした。

奥田　では、ご自身が藝大を目指された理由は？

渋谷　最初は、音楽をやるんだったら音楽のことを知りたいと思ったんです。でも、例えば民族音楽をやりたいと思ったとしても、その地方に行って師匠と寝食を共にするみたいな修行は辛そうだし（笑）、音楽を体系的に勉強するには藝大に行くしかないと考えたわけです。

奥田　渋谷さんにとって、師匠となる方はいるのですか。

渋谷　もちろんいます。私が藝大で一から作曲を習った先生は、小鍛冶邦隆さんという方でフランスのコンセルバトワールで作曲をメシアンに学んだようなとてもアカデミックな方でした。でも、私は最後のレッスンのときに「現代音楽のことは全部分かったから、もうここにはいられません。さようなら」と言って教室を出ていったんですよ。最悪に生意気ですよね（笑）。

奥田　どうして、そこまでおっしゃったのでしょうか。

渋谷　音楽教育には「抑圧」が必要なのですが、私の先生もとても抑圧してきたんです。

奥田　抑圧、ですか。

渋谷　具体的に言うと、西洋のアカデミックなクラシックや現代音楽の作法があり、それをめちゃくちゃ押し付けられたんです。そうしたことへの反発で、私は自分のオリジナルなやり方を見つけなければならないと考えました。

　でも、その半面「自由に作曲していい」と言われたら大学に行く意味がないと思いますし、事実、そういうタイプの先生の弟子で伸びている人は少ないんです。

奥田　抑圧があるから自由になれる、という側面もあるわけですね。

渋谷　それはあると思います。個人的な抑圧は単なるパワハラだから意味がありませんが、大学ではアカデミズムによる抑圧は当然存在するわけで、それは教える側にとっての正義であるわけです。そういうものを体験するのも、大きなインプットだと今は思います。だから抑圧は正しいんです。

奥田　ところで、その後、その先生との関係はどうなりましたか。

渋谷　私が仕事を通じで世の中に名前が出るようになってから、先生は自著のプロモーションで私と対談してくれないかという連絡をくださったんです。学生時代には大変ご迷惑をかけたので、土下座するような勢いで「もちろん引き受けさせていただきます」とお応えし、実際に対談させていただきました。

奥田　それは良かったですね。ちょっとホッとしました。ところで渋谷さんは、教える側の先生になろうと思ったことはないのですか。

渋谷　先生になりたくないから、頑張っているようなもんです（笑）。実際いろいろな大学で教えることはありますが、それは断れない理由があるケースがほとんどです。なぜ先生になりたくないかと言えば、「つくる」ことと「教える」ことは真逆ではないかと思うから。「習う」ことは「つくる」に近い行為だと思いますが、「教える」は自分の余剰を人に与えることと捉えています。だから、本当は教えている暇などないというのが正直なところですね。

（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



「ものづくりの環」の詩

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人――
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/